

## 新春のご挨拶



社会福祉法人  
大崎市社会福祉協議会  
会長 高橋 栄徳

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。  
旧年中は、本会の事業推進に対し、市民皆様方、関係機関・団体の方々には、ご支援、ご協力を賜りましたことを深く感謝申し上げます。  
さて、少子高齢化や核家族化の進行、ひとり暮らしや高齢者世帯の増加、地域との繋がり希薄化など、社会を取り巻く環境の変化に伴い、住民が抱える福祉課題は益々複雑・多様化しております。

さらには、新型コロナウイルス感染症により、人と人とが距離をとり、接触の機会を減らすことが求められる中、地域福祉・ボランティア活動の制限を余儀なくされております。

このような社会情勢の中で、日常的にも誰かと繋がっていること、誰かを支えたり支えられたりしていることの大切さに改めて気づかされるとともに、「誰もが住み慣れた地域の中で安心して暮らせるまちづくり」を目指していく必要があります。

本会では、社会・経済状況の変化や多様化、複雑化する様々な福祉課題に対応すべく、住民一人ひとりの問題を、「我が事」としてとらえ、地域共生社会の実現に向けて、住民の皆様を主体として、各地域の行政区長会、民生委員児童委員協議会をはじめ、社会福祉団体、ボランティア、行政機関等と手を携え地域福祉の推進に取り組むため、地域福祉活動計画[第3期]を令和3年3月に策定いたしました。

本計画の趣旨に沿った地域福祉を推進し、誰もが住み慣れた地域で安心して生活ができるよう、本会の基本理念である『ひとびとの 心ふれあう 地域づくり』の実現に向け地域福祉の推進を引き続き図って参ります。

今後も、市民の皆様方と手を携えながら、地域における協働事業活動を推進すべく、役職員一丸となって更なる地域福祉の向上に努めて参りたいと存じます。

本年も変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げますと共に、皆様方のご健勝とご活躍、ご多幸を心よりお祈り申し上げ、新春のご挨拶といたします。

本年もどうぞ、本会をよろしく願いいたします。

# 社協スタッフ募集

福祉の職場で働きたい方、地域福祉事業活動を担っていく方を募集しています。お気軽にお問い合わせ下さい。

- 職 種
- 勤 務 先
- 待 遇
- 年 齢 / 性 別
- 応 募
- 急 募

保健師・看護職員・ケアマネジャー・介護職員・ホームヘルパー・管理栄養士  
市内各事業所 ※なお、勤務地については、相談により決定いたします。

当会給与規程に基づき決定いたします。  
パートタイムでの勤務可。※勤務時間等、相談に応じます。  
不問

電話連絡の上、履歴書・資格証(写し)を送付ください。

### ●特別養護老人ホーム敬風園

60歳以上の方でも、元気でやる気満々の皆さん大歓迎です。

【業務内容】①利用者への寄り添い ②入浴後の整容 ③食事介助など

【勤務時間】ご相談に応じます。短時間でも勤務可能です。



### 【連絡先／応募書類送付先】

社会福祉法人 大崎市社会福祉協議会 職員厚生課

〒989-6154 宮城県大崎市古川三日町二丁目5-1

(大崎市古川保健福祉プラザ 3階)

☎0229-21-0550



お気軽に  
お問い合わせ  
ください。



## 令和3年度 おおさき福祉の心コンクール「福祉作文の部」

福祉作文の部  
小学生

最優秀賞

## 「オギーの気持ちを知って」

古川第二小学校 六年 竹内 智治

ぼくはスイミングを習っていました。ある日、ふりかえのレッスンでいつもと違う時間のレッスンに行ったとき、片足のひざから下がらないおばあさんがプールサイドに座っていました。ぼくは「瞬間驚いてその後じろじろ見るのは悪い」と思い、あまり見ないようにしました。そして、帰りの車の中で

「その時間帯にレッスンに行くのは嫌だ。」

と母に言いました。母は

「そうなんだ。」

と言うとだまっしてしまい、重い雰囲気になりました。ぼくは気まずく一言も言わなければ良かったと思いました。

その年の夏休みに「ワンダー」という本を母にすすめられて読みました。遺伝子の病氣によって十歳で二十七回もの手術を受けてきた少年オギーの話です。十歳になって初めて学校に通うことになりました。始めは、オギーを見た友達には悲鳴をあげ、じろじろながめ、やがて「病気がうつる」と避けるようになります。しかし、次第にオギーの話を面白いと感じる同級生が少しずつ増えて、みんな仲良く楽しく過ごせるようになっていきました。この本は、障害を持つている人の周りからの反応とその時の気持ち、そのオギーを支える家族の大変さ、いじめつ子のいじめの思い、見た目で判断せずに自身を見る友達の思いが書かれています。ワンダーを読むまでのぼくは、障害を持つている人に対して考えるのが少し苦手、いつも手助けをしないといけないと思っていました。しかし、この本を読んだ後は、オギーがかしこくて面白いことを考えることが得意だったように、見た目だけでは分からない、何か得意なことを持つているのかもしれないと思うようになりました。また、多くのことは自分で工夫してできるため障害を持つているというだけで特別あつかいをしてほしくないことも分かりました。

ぼくは見ませんが、プールで出会ったおばあさんはその二本の足でぼくよりも上手に泳いでいたのかもしれない。あの時は驚いてあまり見ないようにしましたが、今のぼくだったらオギーの気持ち分かるから、驚くだけでなくあつうに受け入れられると思います。もし困っている人を見かけたら「ぼくに、何かできることはありますか」と、やさしく声をかけてお手伝いをしたいです。障害を持つている人とどう接すればいいのか分からない人に、オギーのようにみんなと同じように接してほしいと思つていてる人がいることを伝えようと思います。そうすれば障害を持つている人は、やりたいうことに挑戦しやすくなります。ぼくは、これからは見た目で判断しないで、しっかりとその人と向きあい、その人の本当の良いところに目を向けるようになりたいです。

一人一人が思いやりを持つた行動をすれば、みんなが幸せに生活できるようになります。みんなが笑顔で過ごせる毎日があっていいなと思います。

福祉作文の部  
中学生

最優秀賞

## 「海を渡ったランドセル」

古川東中学校 二年 大場 温

今年、私のランドセルは海を越えてアフガニスタンへ渡りました。

保育園の卒園前、両親からプレゼントされたランドセル。ピンクの刺繍が入った、茶色のランドセルは私のお気に入りでした。小学校六年間使い続け、あまりきれいな言葉は言えないけれど、どんな日も登下校を共にした大切なランドセルでした。

中学校に入学してからは背負うのはリュックサックになり、ランドセルは部屋の片すみポツンと置いてあるだけになりました。これからは使い道は特にならうけれど、思い出のランドセルを捨ててしまうのも気が引ける。そのような気持ちが入り混じり、長い間ランドセルの将来を決められずにいました。そんなとき、私は図書館で二つの本と出会いました。内容は、使い終わったランドセルを恵まれない子供達に、特にアフガニスタンへ送り、それを使ってもらうことで子供達の夢を応援し、支援できる。といったものでした。私はぜひ寄付したいと思い母に相談したところ、

「実は五年前にお姉ちゃんランドセルを寄付したことがある。」

と言われ、私の思いを快く承諾してくれました。私は勉強がしたいと思う子供達に自分のランドセルを使ってもらえたらと思うとうれしくなり、誰かの役に私が立てることがあるんだ。と思いました。それと共に、アフガニスタンで頑張っている子供達に負けないように私も頑張ろうという思いもわいてきました。

福祉に対する理解が浅い私は、福祉活動は難しく、私のような中学生にできることは少ないというイメージを持っていましたが、ランドセルの寄付を通して私にもできることは身近にあることを知り、福祉の魅力を感じました。

アフガニスタンの子供達は、学校に行きたくても様々な理由で学校に通うことができない子供が沢山いるそうです。しかしこのような悲しい現実には、アフガニスタンだけではなく世界中の国々で起こっています。また中学生である私には、多額の募金をしたり、現地へ行って活動するのは難しいと思います。今私達に必要なのは、福祉とは何なのかを学び難いものだけではないという福祉の多様性に視野を広げ、ひとつひとつの小さな思いやりの行動を日常から積み重ねていくことだと思います。その小さな思いやりが重なれば、ひとりひとりが気持ち良く過ごせると思います。

私が送ったランドセルは、今どんな人に使ってもらっているんだろう。そう思うことがありましたが、大切に使うてもらって、その子の将来の希望に繋がっていたら嬉しいです。